大和名所圖會

吉野郡

六坤

ル 4
6321
7

291.65
A36Y
v.7

104
6321
7

教育學部研究
助成費購入図書

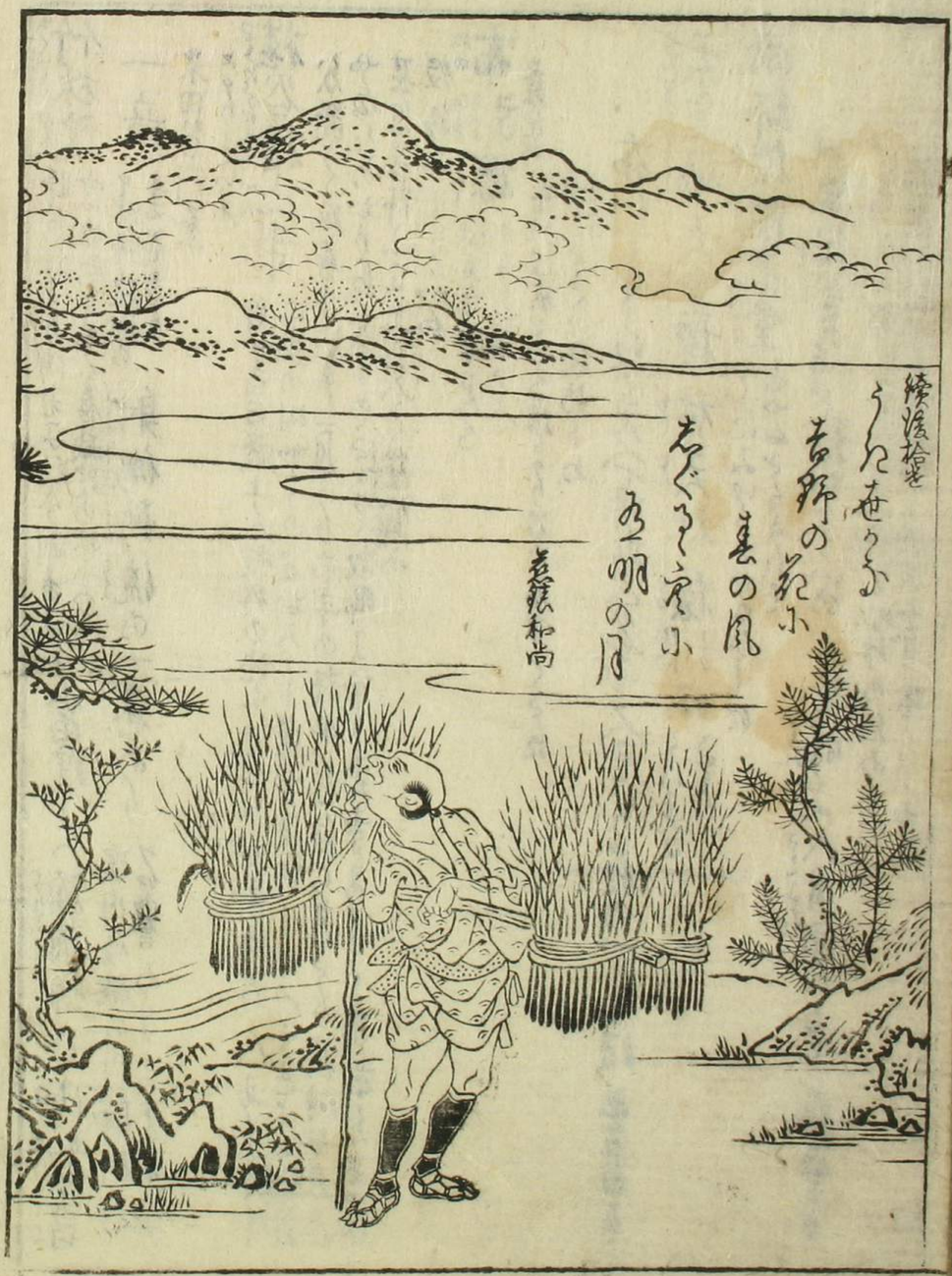
〈3000-326〉

教育學部
圖書

竹林院時の社より御南の社金剛寺の社
宮坂町とゝく喜藏院の次ふあり
一章 義經追討の書簡あり 射御流の一巻あり 當院に頼朝卿乃御教書
米田等白系 院内役職の内射御乃名譽あり 吉見和佐

楠谷椿山寺 釋書白藏上人修行の地なり上人を京師乃人なり
二光の時ゝ
分斷く延喜十六年二月より六年の精修分紙ら是より塩穀
ゆゑひのおりに分不のこゝく故郷より東寺入ゝ堅窟ふ
喜ふ去郡山ゝ入ゝ堅窟ふ
役行ひしゝ
布引櫻 けをゝより入る
去郡紀行 布引の橋をゝる根より谷の座ゝゝ
つゝゝく入作りぬ

布引ふ〻ふ〻入て芳野山名ふ入ふゝり花の一しは 花芳野桜
天皇橋 天皇櫻 梵天社 猿ゝ坂
兩部模觀音堂 ゝにみゆゝ
山里八丹生の川上祭ゝいのゝ 時より入月雨乃宮 後醍醐天皇
山ゝより一里ゝより川下ふ丹生の祭の社あり
觀音堂分ゝく西の谷ゝ 橋井橋とゝあり


續後拾遺
うら吹くふ
吉野の花ふ
春の風
さぐるこ宵ふ
五明の月
慈鎮和尚

瀧櫻（たきざくら） 雲井櫻（くもゐざくら） 瀧桜ハ谷ちかきにあるをいふ 雲井桜ハそら相にあるをいふ

吉野紀行

詞

しら雲とみえつる花の瀧櫻花の波こそみよしのゝ山　大納言雅章

雲井櫻ハ名におひてさくら花しら雲の雲井にたかく見ゆる花もみよしのの山　仝

中院谷（ちうゐんだに） 花矢倉（はなやぐら） 此下に深定寺大日堂 瀧櫻権現社 辻堂あり

此谷ハ源義経身を隠されし所なり人に山路しかども龍ぞ下ぞえていへ岩ありここに佐藤忠信が峯に臥して横川の覚範の法師とけるの所へ又忠信ぬせて花矢倉に射ける花矢倉といひしハ此所の

鷲尾山世尊寺（しうびさんせそんじ） 獅子尾坂のうへにあり田築の後 本尊ハ釈迦佛徒侍る阿難迦葉ハ拝此本尊ハ欽明帝十四年和泉國和泉郡茅渟海中に梵音ひびきて雷聲にたぐへて光赫々として日輪のあざむくを奏しける帝あやしみて溝の直に勅して見せしめらる直郡海に入て見えハ樟木のひかりにおありける是とりて佛工に命じて佛二躯を作らしめて

今の吉野ちる乃樟木の佛像是也 日本紀 日本木像のはじめなるべし

釋迦にまします古鐘あり銘曰保延六年十二月播磨守平朝臣忠盛云々 此所を霊鷲山に比して

月清集

鷲の山御法の庭にちる花を吹よせて嵐のそてなる　後京極良経

居の尾（ゐのを） 花矢倉のうしろ 人麿塚（ひとまろつか） 鷲の尾の傍にあり

子守神祠（こもりのやしろ） 大宮二座 住吉同殿にして吉野八大神祠の其一也 田築の後豊臣秀頼公の再建社檀美麗にしてあり 敷の奇仏ハ吉野永徳の筆也

草根集

吹さそふ嵐の音の芳野の秋寄に子守るなりでもみん神風

吉野紀行

みよしの山路を経にもひとまちてその宮にや花をとぞみる　大納言雅章

牛頭天王神祠（ごづてんわうのやしろ） 吉野八大神祠の其一なり 高算上人遺像堂（かうさんしやうにんゐさうだう） 毎歳二月一日の花供懺法は此上人の

次ぞとうみふそうじゆかひとなす今に

高城山（たかきやま） 俗に城山といふ大塔宮ここに籠らせ給ひし時佐藤忠信虚腹なきしも此所といひ傳へけり

萬葉

一とせ芳野のみ城山に向ひてゆへにかりくるひさてゆかん　釋道親

拾玉

みちの山路の谷にしもあるとこそしらね人の音信もせじ　慈鎮

躑躅囲 遥谷

はるばると分入る人の道もなし

吉野紀行

わかれ行吉野の花もさかりにて井のつゝじ岡の名にふれて　大納言雅章

はるばるの谷へふかき谷深く行ても花

むかしの名はあさくみえぬれど

同

さそはれるる人またかくるゝの谷にも花にたちかくるみよしのゝ山　仝

岩倉谷 はるばるの谷の西の左右に相對せり極めて多し

金精大明神社 神名帳曰金峯神社吉野山の地主神として金御嶽の號とす又同年の秋八月日本紀に三代實録曰貞観元年正月正三位を授くとしるされたり後に藏王權現とて金峯山の鎮守とあがめたまふ又吉野郡の高山にして金峯山の鎮守と申すや

金御嶽 吉野山の一名なり又こゝの峯をいふ源氏物語にもみえたり

拾芥抄曰金峯山にある黄金なり慈尊出世の時閻浮提の地にのべ給ふといへり藏王權現のまもりたまふとぞ釋書曰聖武帝の御時に至り

源正はこの金を得んとして金剛藏王にいのられしかども神ゆるし給はずとぞ又洛七條にある住人の前に此山の黄金を得て前にうちわたす

拾芥集

ひとつに金嶽といふ文字あるをしるしの字治拾遺にみえたり

夫木

紀の川上なる金御嶽にまうでけるに　顕昭

神のすむ此嶽のかげをさしてまうづる人のあとたえず　信實

蹴抜塔 金精大明神のたゞ奥にあり坂を下り出る所なり此塔は義經此塔の内に隠れしを敵のものども追かけ来りて蹴ぬけて下谷宮の方へ落行しとぞ

飯高山安禅寺寶塔院本尊は一丈の藏王權現又役行者の遺像秘佛堂にあり

安禅寺より二町許奥にあり

安禅寺奥院四方正面堂 奥にあり

其傍に藏王堂あり

青根我峯 安禅寺のうしろの山なり此下に義經の谷といふあり義經こゝにかくれ給ひし所なり新古今集の谷に義經落られし時竹をたてゝ向へこえられしといへり

新撰

よし野川いはほの波によるかやと青根が峯に消る白雲　兼政

堀川太郎

吉野山の桜の花のあとに奥なる青根が峯ぞ若葉なりける　公実

ひるがへる
風俗
うき世の
家々屋
肌うりうた
おむすめ
うりうん
鈴書

苔清水　西山法師の隠室あり正面堂より西ゆふあてら堂の後より流あり
苔清水といふ人麿宮より西方の小川に小滝あり
画像あり此所にくの和歌多し　さんぐ此勝景なんぞ清風花月

新してんは白雲分すゝ蒼苔巖分封して冷々滴て幽
遠閑寂ふ〳〵遥ふ塵寰分隔川堂に西方上人こゝにを乃
望霞分こゝに居る人真ふ香爐峯ふ結び樂天が草室
ゝもいひはゞ

こゝ家集
深くともよう山やまむ人もあり我ふこゝろの井乃ゐ　西方上人
西方法師此ふこゝ名のあてを住わせ給ふりとゆゝしくだ
花ちるあばとよみ給ふこゝのそも此所あるんゝ

吉野紀行
花ふいりそ思ひ出ゝれぬ名残ふやゝくいでゝとひしことの葉　飛鳥井雅章

泊船集
ふるさとゝ此のわくふたどりの花こゝ
こゝ源くの宮ふ宮に此さゝり烟雨谷分埋こゝ
船の家ふ宮ゝこゝ院々の陣乃奪心此屋
うゝこゝ西方付る者ひ
こゝ人むゝよりは此こゝ入く世分こゝ
こゝ人のおほくゝ結りの名こゝ奇こゝ名
いぐや唐土乃廬こといふんもまこゝ
こゝぞや

ある坊ふ一夜分のりく

櫻おくゝうれふさゝせよゝ坊の妻　そゝ分

西上人の宗れいゝのあゝゝ奥の院
より右の方二町ゝゝりの入程宗人の
ゝゝ道のゝりゝこゝをこゝ　さゝれ
谷分ゝゝこゝふいと多人ゝ　紙
ゝゝ乃清ゝゝたむゝ
此ゝゝ此ゝゝ久ゝ今もゝゝ
東歌々分

露ふゝくゝ人分ふゝ世ゝゝ　仝
若是技来ふ伯夷あゝば
口分ゝゝんゝと詳由ふ
耳分ゝゝ年

凍ゝゝく谷ふ汲干に清ゝ式　仝

苔清ゝゝふゝ外ふゝゝ
情怜瀑布　西ゝゝ此瀧々峨々ゝ岩間ゝ張落ゝ凡ゝ十　湘夕
ゝゝあり瀧のゝ人岩の前ふ閑あり此岩めぐり分情怜乃小野と
いゝのゝゝゝ情愼が瀧ゝゝ清明が滝ゝゝ

よするべし滝のうへなる山は琵琶山といへり此滝の末は音無川といふ

名所の吉野川は紀州熊野にあり

義経記曰こゝに難所一ツあり吉野川の水上しらぬ糸の滝とや申ける岩の上より落る滝の二丈ばかりなるがみなぎりおちて下は見えず紅蓮の淵の上を遠しくおちてむすぶ水のいきほひおそろしくして此川すがらにこそとも見えけれ岩の西を二丈ばかりなる滝の岩石の屏風を立たるがごとし云云

此蜻蛉が滝をいふにや吉野川の白糸の滝ともいひつけたるにや見えたり

新勅撰

代々をへて絶せぬ吉野川なかれて落る滝乃白糸　延喜御製

新續古今

春の花咲ちる花の木の葉に落る吉野の滝も波やそふらん　源義詮朝臣

新千載

春くれば花の色に流てけり吉野乃山の滝のしらいと　勝従二位為子

蜻蛉小野　上川の荘西河村にあり

むかし雄略天皇四年よし野の宮に行幸ありて御狩ありし小帝も射給ひて弓を携へ待給ふ所に虻飛来りて天皇の臂を刺しけるは忽蜻蛉来りて虻をくらひて飛さりし天皇いとよろこび給ひて

さゐまつと（狭猪待也）わがたゝせば（我立也）たくぶらに（竹原也）あむかきつき（虻来也）

そのあむを（其虻也）あきづはやくひ（蜻蛉也）はふむしも（昆虫也）おほきみに（大君也）

まつらふ（謂仕也）ながかたは（名形也）おかん（置也）あきづしまやまと（秋津島大和也）

とよみ給ひて蜻蛉をめでたまひ此地を蜻蛉の小野と名づけ給ひし此事はくはしく古事記又日本紀に見えたり

新後撰

契りしを袖にみだるゝかげろふの小野の萩原下にのみこそ　為家

續千載

雲かゝる夕日の影のかげろふの小野のむさしの風ぞ涼しき　入道二品親王覚

夫木集

さそふたてゝたれやすむらむかげろふの小野の秋はぎ秋の初風　頼政

或曰かげろふの小野又かざもの岡又かざもの小野又あきつの野辺などもよめり

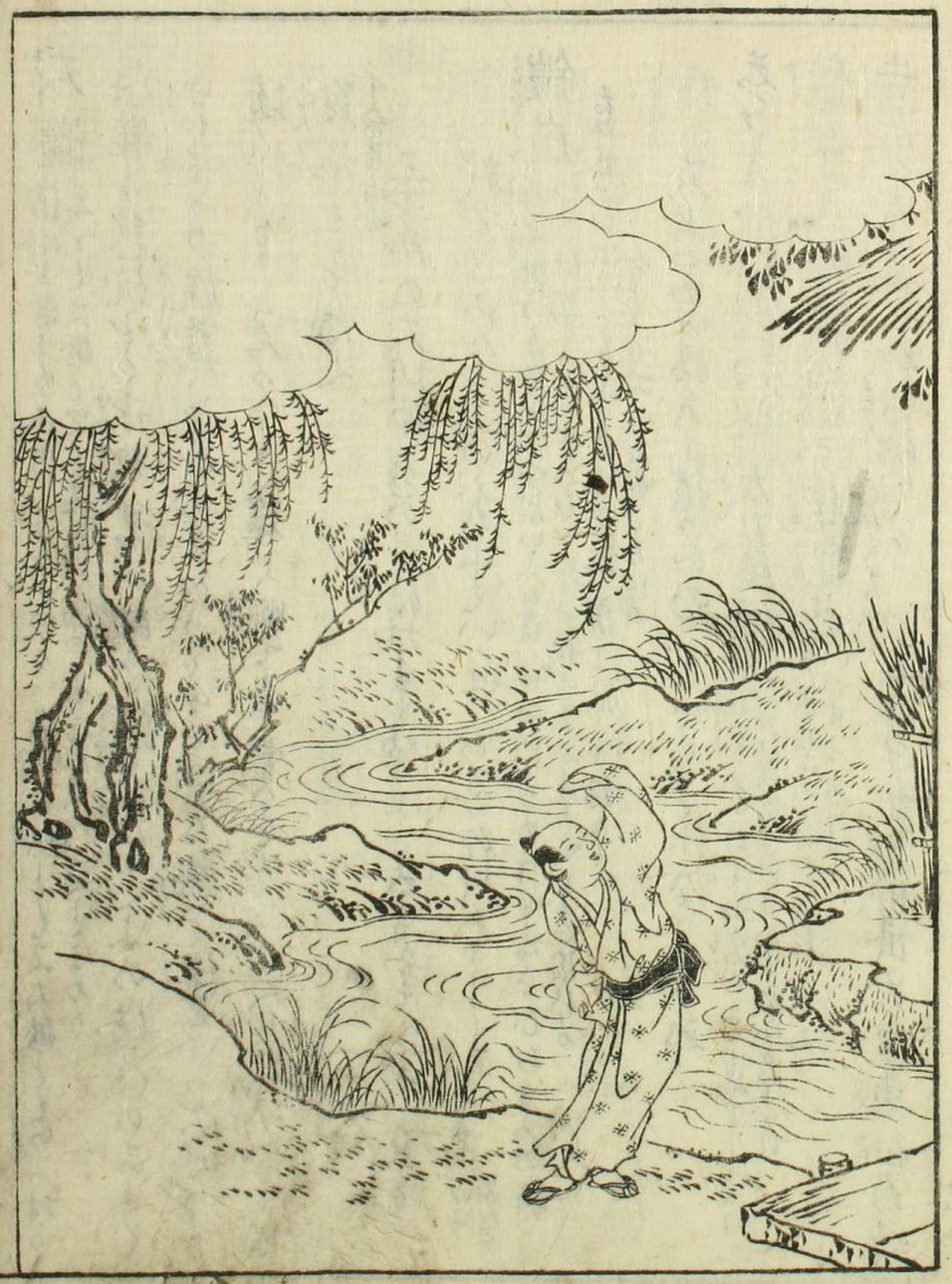
顕昭曰蜻蛉は秋津と讀べし然ればあきつの小野とよみぬべきをかげろふの小野といひならはしぬ

白倉山　西河村の上方にあり怪石巉巌多し

無音川　かげろふの滝より流れて吉野川に落る此川二三町の間水底をながれて地中にはいり又下にて流出る也上半月は上流に有下半月は下流に有

延喜式にいふにあらずといひ伝へし

彩法拾き
いろうるしぬる秋はふ
かぜさむ
ふびさも
あへび
うれる名
えてうん
乃義法師



大瀧 瀧明が瀬より五町ばかり上にあり 一名西河の瀬ともいふ 又大瀧ともいへり 村の名とも大瀧といへり 頭注密勘曰 吉野の大川のべにあり
此瀧は急流にて水勢岩に觸て漲落す 激浪ふの後○の如く
岩上より流落するにはあらで 岩間に漲て沸こと奇観なり
近くよりてみるべし 遠く眺ては賞するにたらず 筏人ここに
縦横とさばく

千五百番歌合
三芳野の大川邊の夜流れ來もゆりしを家にみえさらん　家隆

筏士よこころしてのへ上もいかゞちる花はあらしもぞ　連歌師 宗賢

鎧嶽 西河の瀬の上なる山なり 義経此川邊の竹をみてひむかしへの峯に つきは嵩よくよろひをぬぎ捨たるよりかく名付る
吉野路記曰 此やまより義経吉野落て旅し給ひ おもしく不の人ありける

大瀧や出る清水に鎧かけわかるかくをに合ぬ山の那

志げとろ谷 此所よりいるべし 義経記に見えたり 太刀屋 義経西河へ落行し時宿の主に隠れし太刀 今に西青江国次二尺七寸あり 故に名とせ
龍泉寺 大瀧村にあり 三代實録に見る 弓絃葉井 いつ所といふ詳ならず 大瀧村にあり又六田村にもあり
吉野皇居 舊址秋津のかたなりあるべし 秋津宮ともあり
日本紀曰 神武天皇東征乃時

難波津に住み居給ひ射駒葛城など紀伊國を經て吉野に出させ
宮室を淵練し給ひて吉野の行宮など定めの人其後應神天皇も
こゝに行幸ありて國栖人ごとすなはち出ありて又清見原天皇も吉
野の宮にみゆきおはしましける

万葉
よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見　天武天皇御製

祠枝採葉曰 吉野宮を神代よりと謂ふは万葉二首あり 神武帝を畝火の橿原宮に
都し給ひし時吉野に離宮なりて又臨幸ありしより神代よりといふは神武乃
行宮なるべし 鸕鶿草葺不合尊の第四乃皇子なれど
神代とよめるもゆゑあり

御影石 塩谷村にあり 高一丈 俗南帝王の祠と称す 後醍醐帝第七の宮なり
おへしまた康正二年十二月二日赤松の賊徒南帝王を弑し此地を
逃んとせし所 本邑の郷民大西助五郎といふもの賊乃逆賊を殺し宮乃
御首級を獲て 神主として毎歳祭祀をおこなふといへり
小瀬村新川ちにあり 神牌御製

のかれきて身を奥山の柴の戸に月と心をあはせてぞすむ　南帝王御製

琵琶山 多古村にあり 瀧二流あり 高二十餘丈 廣大瀑といふ 一は高十五丈計 中瀑といへり
井光宅址 碇村にあり 由緒吉野郡の下に見えたり

釈迦岩窟 和田村にあり 深サ二十丈

國見山 伯母谷村の西南にあり 巖巒聳へ林壑邃深にして山路険しく人跡絶たり これより西南に続く峯中にあり

笙岩室 國見の山腹にあり 所謂日蔵上人のこもり給ひし所也 日蔵は朱雀院の御子なりしと 盛衰記 深道の後吉野山椿山寺に住し後笙の窟に入て無言断食して冥土におもむき 蔵王菩薩金峯山の浄土をみせしめ給ひしとぞ 日蔵九々年月王護の短札をしるし給へり 又菅神にはなはだ逢ひて此の短札八字の註釈をうけ 道賢の旧名をあらため日蔵と称すなりとぞ 一説に又地獄を巡りて金峯山の鉄窟にいたりしに 日我はこれ大日本国王金剛覚大王の子なり 菅丞相配流のうらみによりて仏寺を焼き有情を害せり 其重罪我身にあつまりて苦しみたえがたし 汝本国に帰りて一万の率都婆をたて供養して我苦患をたすけよとの宣下かうむりける 釈 又都率の内院を見給ひ聖衆の妓楽をきき 盛衰記 後に十二日に終りて蘇生しけり 其後彼都率の内院の楽を和朝に伝へて見仏聞法楽と号す 一説に此の楽を中華より伝へたる曲なりともいへり

日蔵上人岩窟に籠りて凡四五百歳を居たりける鬼神来りて無量億功のくるしみをのがれさせ給へと頼ひしかは 宇治拾遺にみえたり

新古今 大峯の笙の岩屋にこもりてよめる
寂寞の苔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき 日蔵上人

金葉 大峯にて思ひかけず笙の岩屋にてよめる
草の庵をなに露けしと思ひけん漏らぬ岩屋も袖はぬれけり 僧正行尊

千載 宿りして読侍る
宿りする岩屋の床の苔莚いく夜になりぬ寝覚めせぬ夜ね 前大僧正覚忠

玉葉 笙の岩屋にこもりてよみ侍りける
いかばかり時雨に袖のしほるらん岩屋のむしろのひつ 普光園入道前関白左大臣

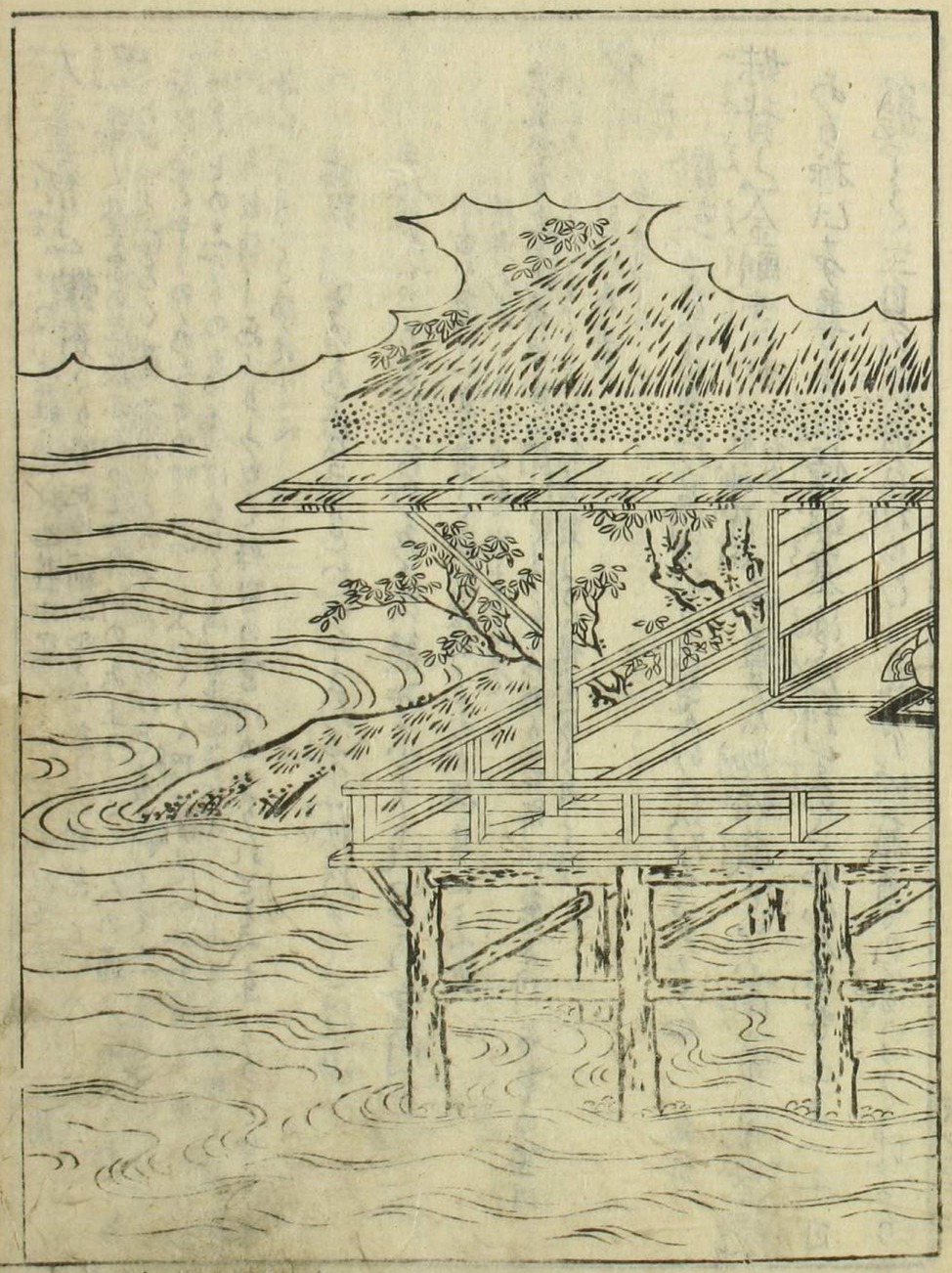
風雅 笙の岩屋にこもりてよみ侍りける
ひとりおもふ苔の袖をとふ岩屋の名をそ頼む 静仁法親王

新後拾遺 笙の岩屋にこもりてよみ侍りける
しかしなく雨もかかる岩屋の床さぞぬれけりみちて 前大僧正良兼

山家集 みづからかきさすの岩屋へまかりけるに岩屋のうちにありけるを聞ければ
今宵こそあはれもあつき心地して嵐の音をよそに聞かな 西行

朝日岩窟 鷲岩窟 共に國見の山腹にあり

みちのく
ふか梅ゝ
笠の
かうりせんば
ちくらゝ
御用
清左京吉春御製



大臺原と　北川上莊西北と莊ふ屬を孫岳峯嶽蒼々たり勢紀の二列ふ分ちは故ふ二國岳と稱

巴淵　大臺原の巴淵ふあり右郡川の名上ふ流れ人の通ふ所もあるべ
淵沢あるとかうの名とその中　いとふくるくるの名とその中　巴が淵といふあり　風さこ妙
けどその名ぐりの毒蛇はりくくいりの水ひさかるーふより名ひ仏寄の宮川のかぐれとそ人赤ふ名ひ右
川の名ふはーあるりの水かさはとこと

右郡川その名上ふ名をとむ乃東萩はさこは沙

大蓋やとりをに山の名とこ熊野ふよりは名乃宮川
はおい右郡と記ふ載くあり法師とあり撰集にこば
後考あるべー又上の奇出まる未考
大和巡覽記曰大蓋原ふ巴ふ淵とくくくあり右郡川熊野川仲寄の宮川
はこ大山の名上ふりとくく虚説くくく信ぜこくを

宮川　右郡川名上の
と家　名ふ名べー

影ふつる右郡の奥は宮川のむーふ見けんふ考こだ　あり

妹背と金剛寺　川上莊神郡谷村ふあり　本尊ふ地蔵と人南帝自天二陵
あり拝は本尊と役優婆塞海度利生のふふ金堂と一千日
籠ふくく生身の薩埵ふ祈ひーふ地蔵尊の像くくはより

涌出ーふひーふ優婆塞の心ふ柔和忍辱の御ふくくくく未世
の流はいでら利益ふあべーやくく地蔵尊ふ学ふやくく抛ら
はふれだは所に止ふ行ふと云御ふくくく　一説ふ涌出の地蔵ふ優婆塞
大正記ふ人ふくくく　のくくふあくくんば伯耆國
鹽葉と　塩葉村の上方ふあり巔ふ天空平と人と中ふ
菊岩窟　正善岩窟　聖天岩窟　共ふ柏木村ふあり　窟中ふ石鍾乳あり凝結ん
く珠玉纓珞の狀とくくくの莊多ー　石鍾乳のるふ郡名所圖會拾遺
不動岩窟　柏木村ふあり　窟の口窄隘ーて偏く入くくの数百歩あり窟中ふ潛
ある名源窮くくるふー下流右郡川ふ潛通を
柏木坐神祠　柏木村ふあり十二社權現と称を
國栖莊　窪垣内　川上莊カケ村の氏神ふ大郡南國栖郡と
以上七村國栖莊と
國栖行幸ふ奏と是は右郡の國樔人の事根元日　元日節會　國栖奏　二献
ふ右郡宮ふ行幸あーー時ふ栖人ふ来くー一夜酒ふ給くくくひ

うるはしくさど人山の菓をとりて喰ひ又蝦蟆を煮て名をば毛瀰といふ
けく賞味となして喰けるとぞ吉野の川上にわたりて巌をかへして
谷深くかけたる所なれど路さかしく住たる故に常に来朝することなけ
これなりける其後常に参りて年魚などのものを献しけるとかや
今の國栖の奏といふ事も斯る所より始れる事にて吉野より
年始に参る事とぞ心得たり 云々 又延喜内式の部にも見えたり

源平盛衰記曰吉野國栖といふ者は人の姓なり浄見原の
天皇大伴王子に襲れて吉野の奥に籠て岩屋の中に忍び御座け
るに國栖の翁粟の御料にウグヒといふ魚を具して供御に備へ奉る
朕帝位に上らば翁を供御となし召されんとの綸言ありける後大伴王子
を誅し御位に即て召出してより以来元日の御祝ひある國栖乃
翁参りて桐竹に鳳凰の装束を給りて豊の明の五節にも
此翁参りて粟の御料にウグヒの魚を捧参して御祝に進め殿上
より國栖と召れその時は聲をたて御笛を吹て舞を仕ふ
此翁の参らぬ中には五節始らずとかや

吉野山記曰大淵より國栖へ一里あり浄見原天皇此所へ蔵させ給ふ時に乃
翁鮎の鮨を御調進し御供御の料となしてに下されし故門に木を立
此君御代に出給ひ魚の生たるを御中にまゐらせ給ひ木立ちて
そのまゝいきたるとなん扨かく御代に出させ給ひて人是を國栖のよろこびを
とりわけの翁を國栖の檢正と仰せられ
今に末く是を檢正と云ふ

吉野郡日國栖といふは大内の節會に笛をふく人の此所よりむかし
まゐるのなりとぞ

ちらちらと吹は今もありて國栖の笛より花は今さかりなり　大納言雅章

御垣原　清見原天皇おはしましける所にて御垣原といふ名所あり
此所は御垣原とも云ふ 一説に海部日御垣原を名所なりとも御遠に
よせくるしみかきもりの
松もよめり

新勅撰
古里の御垣が原のはじもみぢ心とちらせ秋の木がらし　家隆

続後撰
霞しく春もさすがに御垣が原に若菜摘てん　俊成

新後撰
今よりは若菜摘べき故郷の御垣が原も春を知るらん　入道前太政大臣

玉葉
君が世は御垣が原の若菜摘む　為氏

續後拾遺
白妙の袖ふる雪
若なつむ
佛塚ら
京の
梅の
ちり花
定家

耳我嶺（みみがのみね） 窪垣内村の上方にあり山勢盤紆として幽勝の地なり一説に吉野の異名なり八雲御抄に吉野にありといへり

万葉

三芳野の耳我嶺に時なくぞ雪はふりける間なくぞ雨はふりける　清御原天皇御製

加茂真淵曰御嶽嶺にて意をなしたり又は山の名なるを雑記に細か
つらねて御金嶽と云る源氏物語に御嶽さうじ又今昔物語
にも黄金の多きよし書て皇朝のむかしより金の峰といへり財に
こがねのみたけと名づけしは是等黄金のあるところをおもひ
延いて大和国のうちとても耳我嶺金峰の外にありとは見えず
よく考へざりしは甚しく地理のことにうとし
金の埋まれる弥勒の出世を待しといふも例の虚ごとにて中々にも
小むかしとかや

國栖山（くずやま） 南国栖村の上方にあり峰巒畳嶂として四時蒼翠をなし山下に瀑流あり山中に神祠あり

小牟漏岳（をむろがたけ） 小村の上方にあり青峰高く聳へ巉然たり遠く山中に神祠あり

丹生神祠（にふのじんし） 小村にあり小川荘七村の氏神也神宮寺あり

象山（きさやま） 喜佐谷村上方にあり八雲御抄曰象山象の中山ともいふ又象の小川の源なる所にあるよしといへり

拾遺

三吉野の象山かげにたてる松いく秋風にそなれ来ぬらん　能宣

新続古今

浅茅ふかく袋杖風を吹さそふ象山かげの川しけれは　順徳院

夫木

大和路の象の中山あけつくしもそ　行家

象小川（きさのをがは） 水源青根嶽より出て流れて外象橋の過て吉野川に入

万葉

昔見し象の小川を今見ればいよいよさやけく成にけるかも　家持

夫木

よしの山青根が嶺にもれ出て象の小川の玉散る志川のなか　知海

假寝橋（うたたねのはし） 一名外象橋 八雲御抄に出たり

夫木

橋の名をきけばうたたねの人のゆくとあらはるにつらなるに　東寺法師

櫻木神祠（さくらぎのやしろ） 喜佐谷村にあり

吉野記曰 桜木の宮と宮滝のかたはらにありと

滝の糸は花にかかりて吉野の山錦織出しけるやと疑はれぬ桜木乃宮　飛鳥井雅章

夏箕川（なつみがは） 吉野川菜摘村に至りて菜摘川といふ

万葉

吉野なる夏実の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして　湯原王

続古今

夕されば山かげすずし夏箕の川は秋の夜の月　中原行実

新後撰

なつみ川岩越す波の夜にしも鴫ぞ鳴くなる　院御製

続千載

山かげや夏みの川に鳴く鴫の音さへ羽風も波に氷るらん　権大納言定房

花籠水　吉野山記曰菜摘里小花籠の名〻く石水あり
又稚児ヶ淵　仮路甚だ険し　蔵王堂の名花の東ふ人〻くし
吉魚張　ふつる里のかたりうるぐしい
万葉　我宿の清菅生つく吉魚漁の笠の上ふ降る月の新しも　家持

日

吉魚張の笠身のうへのしかなきてとさ〻きる月の新しも　家持

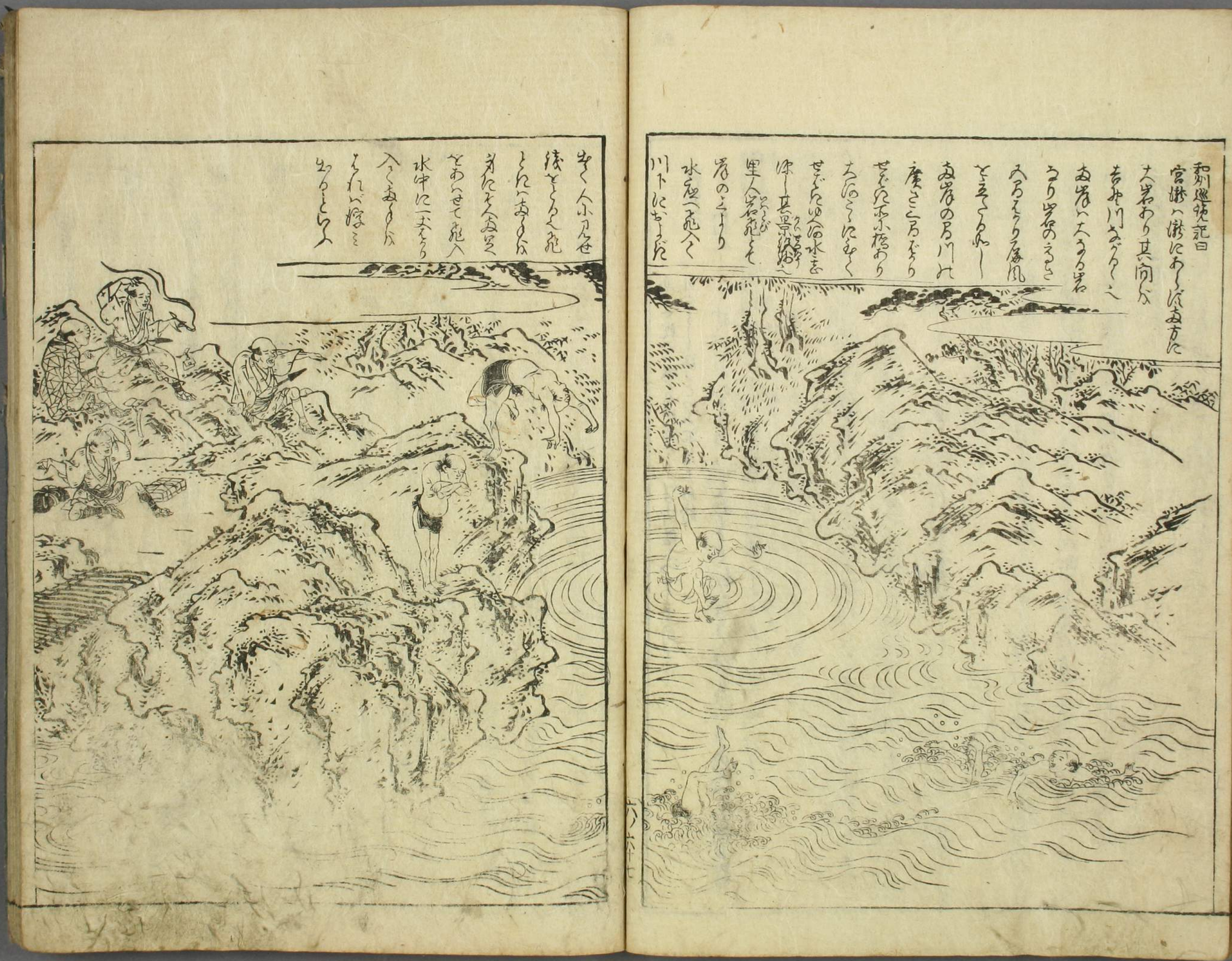
御舟　菜摘里の東南ふあり外よりこれが入口とでかたち舟のかい
万葉　坂路甚だ険し　蔵王堂の名花の東ふ入口
勅撰　滝のうへ舟山より杉は色ふ入てるふ秋の風
勅後撰　みよしの川舟のしふ立ての紫ふ人舞
続後拾遺　滝のうへ波おだしく吹ふ舟の上乃掛ありけり　正二位藤氏

日

立ての舟の上ふ立ての舞を分上て鳴る日数なくさ　後頼朝臣
櫻尾山　櫻尾村上方ふあり　佛ヶ嶺ふもあり
後撰　日くれぬ山ふ鳴て立ての秋風吹　平源時
日晩邪　中荘菜摘村ふあり

亭子院宮滝ふ御幸ふつかまつりける時
勅撰　日くれぬ邪とふ人ふ妹もがと思へ大納言家

日くれぬ邪とふ人ふ妹もがと思へ　大納言家
川上鹿鹽神社　櫻尾村上方ふあり　今大和明神と
稱ふ國栖荘七村の氏神之神名帳出
櫛井坐神社　櫛井村ふあり　式日宮ふ称ふ中荘七邑
宮瀧　宮瀧村　両涯清潔　怪石磊砢　南の岸ふ巨石あり
壁のごとし　流下九重淵ふ臨んで善水練る者石頭より
ふ中ふ投く流ふ隨ふて下流ふ生ふ飛瀧とふ人ふ壮観ふ
代々の帝もこれ幸あり
菅家御詠　昌泰元年十月廿五日宮瀧ふつかまつ遊び立ての日詠
ふ日ふ詠
ふ其瀧のありさまをごりこの町ふ
ふ流ふ石ふ
大和ふ
後撰　ふひさの白糸ふ


剛巡洗記曰
宮城の潮にあり
大岩あり其向ふ
方に
吉野川なり
其岩に大なる岩
あり岩の
うへ
入ること
疾風
とゝ
ろ
其岩の
川は
廣さ
水
川下に
出く人小刀を
抜とゝろに
入
水中に
入
出

後撰

宮の瀧むかしもなほ[illegible]

同

秋ふかみ宮瀧の白菊はうつろひぬらん　法皇御製

續後拾遺

宮瀧の滝はなほ[illegible]　素性法師

山家集

瀧かけの宮瀧川の波[illegible]　光明峯寺入道摂政

新古今

[illegible]　同

懐風藻

萬丈崇巖削成秀千尋素濤逆折流

遊吉野川

欲訪鐘池越潭跡留連義稲逢槎洲　紀雄人

友非千祿友賓是飡霞賓從歌臨水智長嘯樂山仁

梁前招吟古峽上簧聲新琴樽猶未遊明月照河濱　藤原萬里

清滝の原

宮瀧のひろ[illegible]

万葉

[illegible]

千載

曉ふるほどやたゆらん月影の清滝の原ふちとりぬくらん　右大臣

新古今

むすぶの夜れまりに撒はるる清滝の原ふちとりぬくらん　太人

簀橋

宮瀧のふるれ小柴橋ありふ

樋口滝

滝口の原　滝口の原のひろ[illegible]ふあり

大滝の野辺

巡幸記曰宮瀧ふ[illegible]ふ大滝ふ[illegible]名所あり

新古今

みよしの大滝の岩ぬきの古柳ひけばたちまちみなれ[illegible]　補仁親王

新千載

[illegible]

瀧御門

宮瀧の秋はの宮かよる[illegible]　玉水瀧宮古[illegible]名所の名枕ふ[illegible]　修正坊意

万葉

東の瀧御門ふ[illegible]

夫木

今[illegible]氷し解ぬ玉水の瀧の宮古[illegible]　舎人等

瀧浦

藻塩草曰宗祇法師の泊[illegible]ありふ瀧の裏[illegible]　光明

多藝津

清滝の内　斉枕曰大和國[illegible]

夫木

芳野の瀧津河の底の[illegible]　[illegible]

遊屈川

吉野川の異名[illegible]　[illegible]

夢回淵

御料荘新任村ふ[illegible]　[illegible]

神明井

下淵村の路傍ふ[illegible]

大滝源

下淵村ふ[illegible]

法興良塚 今本村ふあり 敏明天皇の皇孫 建王の塚と日本紀ふ 天狗塚とて人黒彦皇子

新漢南墓 は村ふあり 俗ふ天狗塚 原人輪王の塚と日本紀ふ

今本寺 は村ふあり 一名石光寺と名弥勒寺とて 年久しく頽廢しる今小堂あり

伽藍國十人寺ふ位ひ 蓮入法師寛弘年中初ちて 親世者の霊爰ふ蒙て小至て夜く光ありあやしやそ

りく見ふ巖上ふ石板あるく落葉埋んく苔生ふ

石面の数葉ふて ひんとて弥勒と尊の像ふ彫ける

人工の業ふあるに則精舎ふ建て久しくりひく移り

祥瑞あるく入寂る 釋

藥水井 茅村ふあり 疫病ふ則 飲ふ則平癒ふ 畢ふ 癒ふ

幡神祠 拾垣内村ふあり 北荘七村の氏神と

比蘇寺 池田荘比曽村ふあり 一名現光寺 推古天皇三年冬月 淡路島の海中ふ浮

沈水香ふ帝ふ献て聖德太子ふ献ふ 実ふ雖古乃めく

その花ふ子ふその脂ふ薬陸ふ水ふ流く久しくふ流水とひろよ

入て久しくわふ沈香と奏ひ上ふ帝歓びたりく

観者の像ふて世ふ寺ふ時く光明ふるち

ふ見ふとあり 釋書 そ上ふ現光寺とふづけられて 王林抄

栗天八一と書しる額あり 西大寺の

興聖菩薩戒法ふ 繁昌ふ今破壊 僅ふ遺

嶋天神祠 池田荘麻志口村ふあり 上ふ中麻志の氏神と 椿井 麻志口ふ

宇治向山 千俣村ふあり

宇治乃山 風ふ 藏あて夜ふて妹ふあるふ 長屋王

吉野水分神社 丹治村ふあり 古ふ水分と坐て 年ふ洪水ふ山崩と

神社ふ遷て文武帝二年月神馬ふ神ふ献り雨ふ祈て

ふ日本紀ふ 毎歳初春吉野と僧侶ふ社参ふ 俗説ふ神名帳ふ代実源出

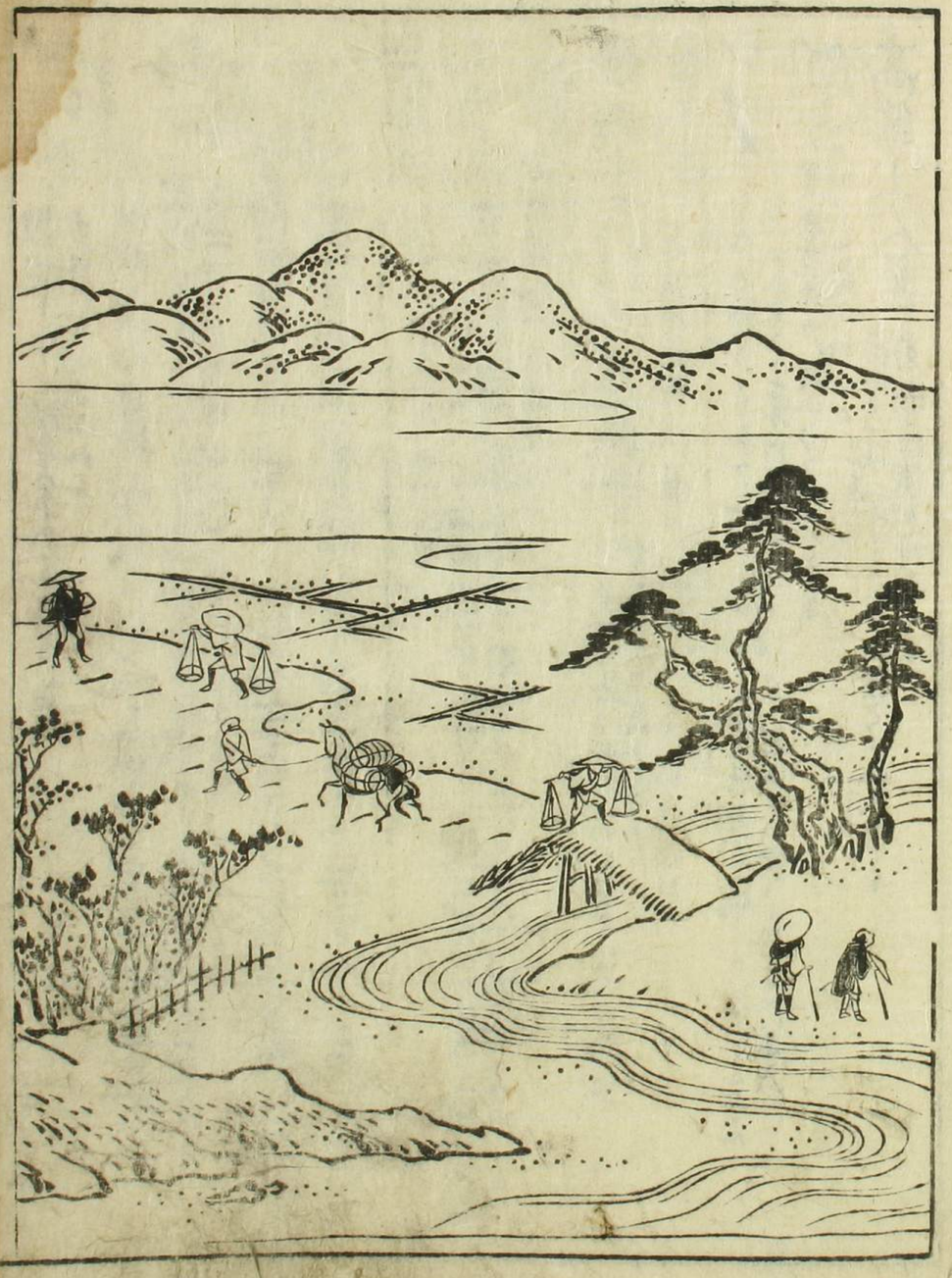
六帖

行幸ふ 名所ふ

丹治川 名源吉野ふ山ふ流れ丹治

飯貝ふ経く吉野川ふ入

寶治百首
みさゝの
東野の
霜をはらひ
敷定



安騎野　岩城下市二村の名ふあり仏貴と拾日
万葉　吉野とのかとふあり
あをによし奈良の都に咲く花の匂ふが如く今盛りなり
東野　岩城下市二村のふあり言塵集曰東野芳野の安騎の内なり
万葉　藻壁州ふ吾妻野安騎野同名あるのふ所なり
東野の煙たちたる所かぎろひの立てるを見てとつ月かたぶきぬ
烏羽千草　九吾妻野の宣ふ吾の時ねもとと神ふ老ゝる黄ゝ下葉
秋野川　下市川ともいふ名所古野と
下市名産鮒鮨　岩城川の鯉鰡魚ふ下市鮒ふ製ふ其魚ふ盛る器
宮の秋海の名ふ魚ふ形状ふ似ふ故ふ名ふ
諸邑より多く出る
願行寺　下市村ふあり　立興寺　下市村ふあり弥陀の名號ふ及び絵像
実如上人の裏書あり
瀧上寺　岩城村秋野の川縁れ　清水寺　廣橋清水村
上ふあり　ふあり
土田川　名所畑金ふ多ふ　笠本川　名所新本嶺より流れ笠本
土田ふ至て吉野川ふ入　桂ふ公絵く丹生川ふ入
鎧岩　黒滝荘中ふ村ふあり方丈丈余
高等上人墓　岩城と横と寺と住し後ふ入寂を
黒滝荘横尾村ふあり

烏栖と　岩城村ふあり一名
懐中抄
深々れと賀と宗人の名栖の中と
鳳閣寺　名住村ふあり境内ふ寶篋印塔あり銘ふ曰正平二年二月建
俗傳ふ曰聖宝尊師の母れ塚
茅金嵩　槇原村ふあり高く聳へ
倉瀧　黒滝村ふあり絶壁あり　常學寺　黒滝村ふ
千尋の中ふ飛流を　ふあり
後村上帝皇居　黒滝村ふあり俗ふ
傍ふ總福寺の故址あり
春日神祠　向加名生村ふあり辻賀名生の里々後醍醐天皇那ふ藏
鎮國寺　向賀名生村ふあり後醍醐
造立て吉野ふ勅願寺
後醍醐天皇皇居　加名生荘和田村ふあり傍ふ華藏院の故址ふ古蹟あり
楠氏寄進して
丹生と　丹生荘ふ丹生　丹生瀧　丹生村ふあり
丹生川　名所吉野ふ流れ
宇多郡ふ入
丹生の氷ふたゝく川波も月の影とそ
は　稀々ふ今ゝ流れ水の金ふ丹生の根と
名所
月雨ふ丹生の川波の根とてひろ
ひろふ
名所

冊生水上神社 冊生村ふあり 近藤四村の氏神 式名此三代実録出

伊弉冊尊 狗過槌の[illegible]ふやの[illegible]れく[illegible]ひね其さ[illegible]

の間ふ土神植と姫おとび水神国象女[illegible]

[illegible]の[illegible]孫[illegible]社ふ雨[illegible]霖雨[illegible]やさ[illegible]の勅使[illegible]

[illegible]の四[illegible]ふ[illegible]神武天皇の御字ふ[illegible]磯城と[illegible]賊ありけ[illegible]

帝足[illegible]追[illegible]せん[illegible]牛牧巌[illegible]

天神地神[illegible]日本紀ふ[illegible]

冊生寺 冊生村ふあり 櫃岳 貝系村 善徳寺 楠正[illegible]

白銀嶽 右田荘夜中村ふあり 銀[illegible]

波賀神社 銀の岩あり 今神嶽宮と称に 右田荘

十二村の氏神 式名此三代実録出

檜ふの迫川 名原檜ふの迫の岩より

波比賀神社 槇村の西ふあり 今美金岳宮と称に 境内小祠 天[illegible]

鷹巣 立川渡村ふあり 山頂高く[illegible]たび[illegible]樹木[illegible]々[illegible]鷹の巣あり故ふ

名[illegible]中ふ多吞嶺あり大[illegible]川の[illegible]

立川渡坐神祠 立川渡村ふあり 今天王と称を 禅龍寺 立川渡村ふあり

宗川荘十一村の氏神

乗鞍山 [illegible]谷村ふあり 白瀑布 西北村ふあり

天川荘和田村ふあり 高さ十八丈

龍山 中ふ滝あり[illegible]九丈 惣門瀑布 坪の内村ふあり 樹青秀[illegible]

伊波多神社 和田村ふあり 今立和宮と称に 中ふ滝あり

槇尾九尾 和田三村の氏神

稲邑嶽 天川荘洞の南ふあり

[illegible]巌[illegible]して奇観あり

朝鮮嶽 稲邑嶽の西ふあり 山脈わ連[illegible]

[illegible]旦ふ[illegible]高ば[illegible]久鮮[illegible] 故ふ名ふ[illegible]

天川 名水源水源上ふ嶽より源[illegible]洞川の北ふ流[illegible]ふ合[illegible]

長秋詩藻 衆溪と合し村村ふ絶く清水ふ至る十津川と云

右[illegible]

[illegible]やちる[illegible]んあ[illegible]の川[illegible]乃つ[illegible]みふあ[illegible]

龍泉寺 洞村ふあり 上の[illegible]人多[illegible]に[illegible]寺おと清泉あり

燈籠洞 洞川村ふあり 岩窟[illegible]流[illegible]下[illegible]沈[illegible]小清水と云

[illegible]洞[illegible]入[illegible]人泉源通し[illegible]龍泉寺のお[illegible]佛出[illegible]上乃滝[illegible]小滝と云

将軍塚 十二村荘北俣村ふあり 石碑十三あり 龍右に羅刹に里人毎年十月

六日ふ祭犯[illegible]む或曰将軍陸良王の墓と云

池津川 名原池津川の中より[illegible]大俣川ふ入

中は川上至る大俣川ふ入

大峯天河社

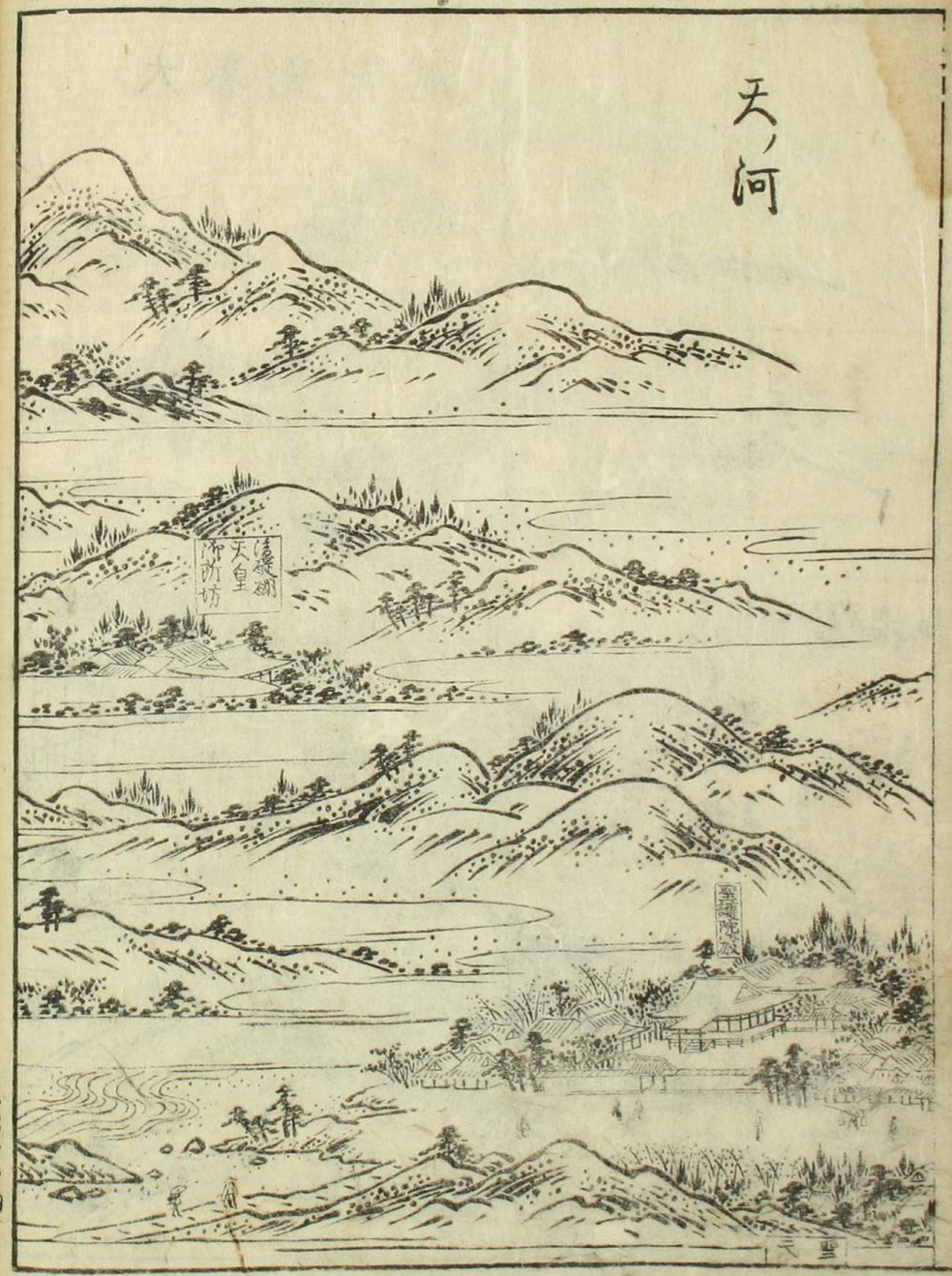
本社

弥山嶽

太鼓ノ滝

高倉山

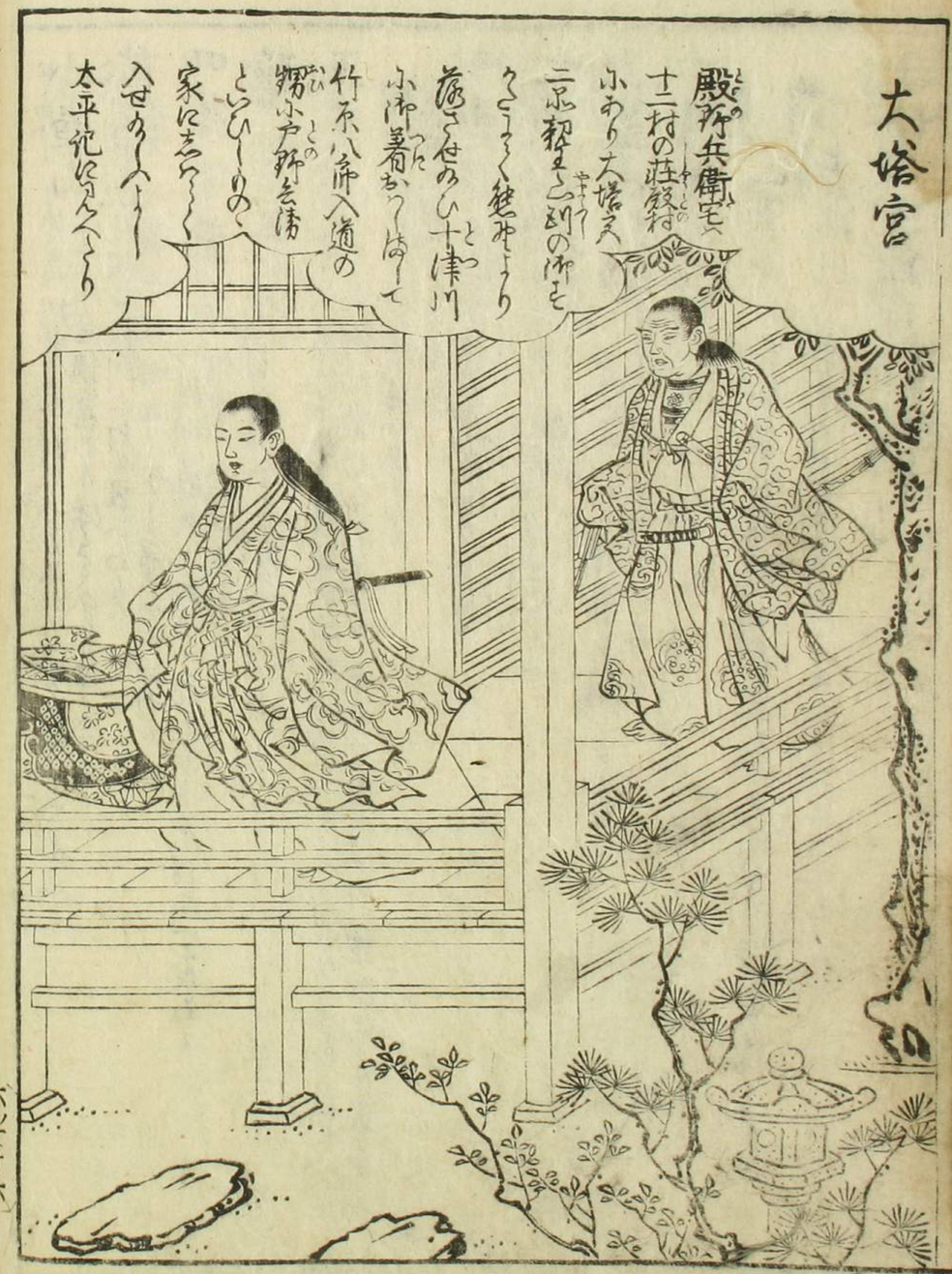
五丈瀑天

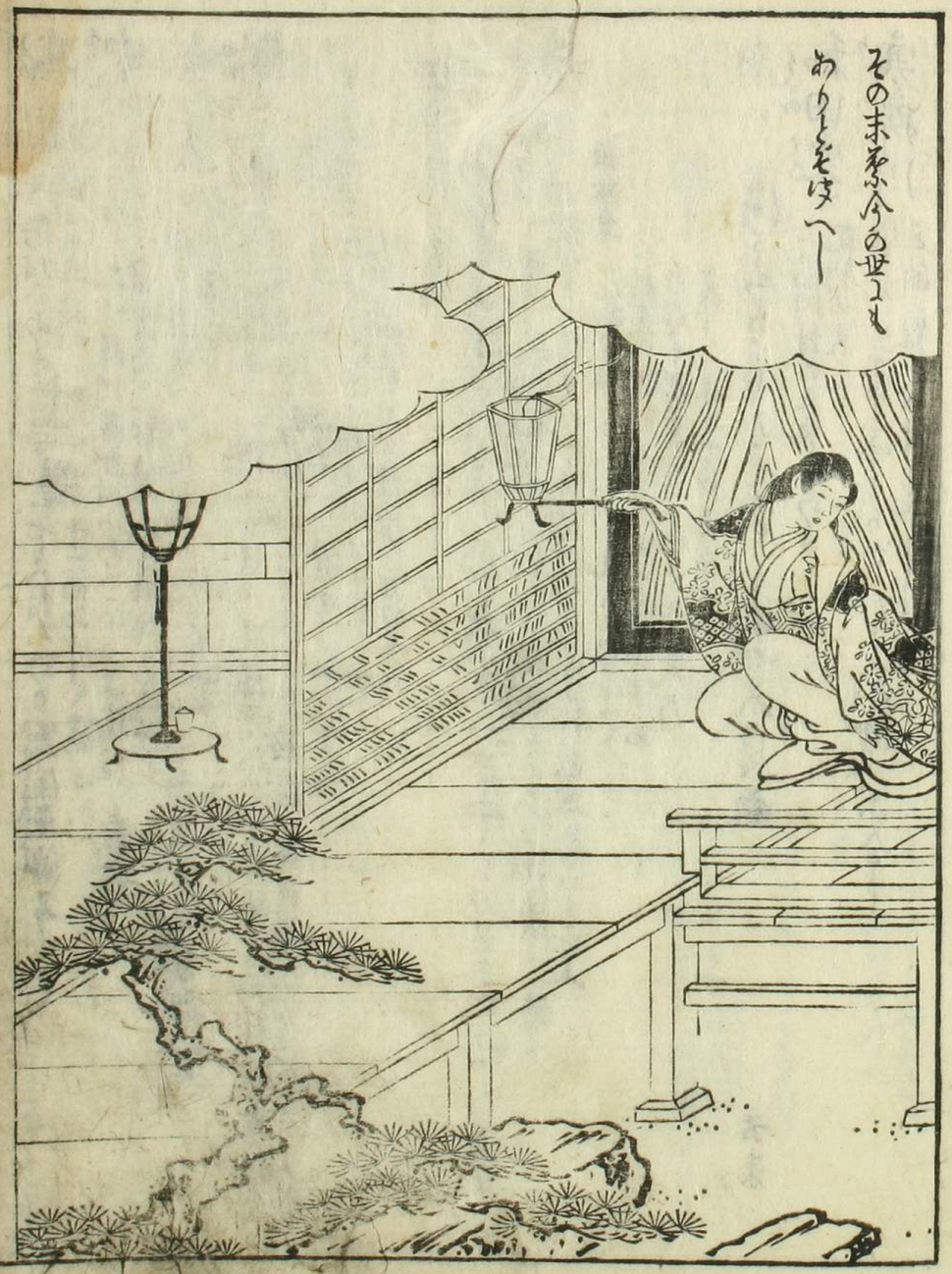

天ノ河
天皇
御所坊
五重塔

左京業平朝臣
天の川はいわくら
入定しるし
海海おい
ひろくなり

琵琶山白飯寺 天川坪内村 役行者大峯の嶮路なひ給ふ所
なれども霊験ふ禱しるしい小岩窟小清泉つきなく日二祈霊
田光ふかやくを廟あり琵琶の郷首あり人心の迷ふ所ひ
より琵琶と號せり其後弘法大師ここに来る千日の修法を
無賊天女現しめひしりは其尊像ふ彫刻し神霊ふ満ちなる
天川無賊天足之又宗像神祠しも崇む天川荘二十一村
氏神ここに正殿拝殿御厨所十二の小祠四箇の怪石ここ所の清泉
あり寺ふ妙音院ここに號を観音堂地蔵堂薬師堂行者堂
護摩堂二重寶塔僧舎ここ宇 理性院神福寺 来迎院 あり又護良親王
寓居の所ふ御所坊といふ 別来迎院 又什寶蘇悉地経乃跋
書ここ僧正仁海之化疏一章ハ門秀海孫を其外正平年中乃
綸旨元中九年中務卿の令旨等あり
池津川神祠 池津川村ふあり 文安元年の祭式あり 乾と 坂本村ふあり 紀別の畏あり

小壺山 池津川紫園二村の上方ふあり一名金山又高と
称ここ中小金鑛窟あり海ここ九二十余丈
荒神岳 北俣池津川二村の界ふ小祠あり
四所明神祠 十津川荘折立村ふ一座あり小系村ふ一座あり
薬師堂 十二村荘堂平村の氏神ここ
王置神祠 王置と称ふあり 王置川 名源王置の中ヨリ流れく
正殿若宮白山社稲荷の祠本地仏堂神楽殿あり祝家ハ
別王置氏ここり僧坊四舎あり 王井川ふ流れく安居川と入
辺濃の村里ふ居住ス
行岡八帝墓 十津川荘玉井川村の
管内経尾の上ふあり
七面と 御とのあ舟川荘藤原村の東ふあり
七者お建ここく蓮華の
王置と 王井川村あ北一里ふあり紫微森弧ここく
中小月見窟中山土室名の別峯あり
十津川 名水ここり天の川の下流ここく諸村ふ流れく
支本 と通村ふ至ここく紀別ふ入
一云芳地のこれあるこの十津川の川系もあること浮世ふ 公卿
協川百首
右郡と十尾は川上右源ここりて民の家なるこん 國信
玉垣内坐神社 天川谷十村の氏神ここ


大塔宮
殿の御兵衛宅へ
十二村の荘務
ふゆり大塔宮
二京都をこの御
くるくる能みよう
落させあひ十津川
ふゆ着ちう陣て
竹原八郎入道の
嫡小戸郎兵衛
といひしものゝ
家にたちゝ
入せゝ入ゝ
太平記ゆんくゝり


その末家今の世こも
ありとそ世へ〜

高瀧 長さ十二丈 十二瀧 七名村小あり急流飛瀑すべく十二曲あるべく高し

中村坐神社 十津川荘中村小あり今王子権現と称し中葛川祢保川流名の氏神と

小杠と 十津川荘葛川の南小あり 行者嵩 小森村あり上小あり巓部と

湯原温泉 二所小あり一所は十津川荘湯原村小あり一所は同荘武蔵村乃東泉寺小あり俗もち時々別病疾八治に湯原と類字名所

小和田小あり十津川の温泉小と共に伝へ云ふ

宮ノ峡田の温泉と共に痛の口ノ分字

類字名所玉葉集

湯の原小 湯の原小 芦ノ谷と共に妹小 [illegible] 無終と 十津川荘東畑村西南小あり谷幽邃一望遠し故に終と一坂とも云ふ支別あり [illegible] 太尾と云ふ

泊船集 大和紀伊のさかひにて一坂越奉加十ノ社来の咒礼なとにて奉加十ノ名れ料足つみ〜ゆ紙乃もとふまつり伝る

佐ゝなりもとそゝ一坂や入月雨 去来

和田峯 上湯川村の上方小あり 紀別の男と

寒葉川 [illegible] 小合一 芋瀬川小合一 [illegible] 十津川小入 [illegible] 小合一

[illegible]

三浦坐神社 祢葉川谷六村 氏神と 西坐神祠 瀧尾新宮と称し西 [illegible] 菴住の氏神と [illegible] 紀別の男と

芙精と 瀬原村小あり この形崖嶮しく [illegible] 十津川荘小属し [illegible] 十津川荘小入

瀧川 [illegible] 小至る十津川荘入 蘆瀬川 [illegible] 十津川荘入

清納瀑布 十津川荘大祢村小あり高十丈計 分坐神社 [illegible] 荘中戸の属村小分村と [illegible] 小あり赤瀧寺戸 照川堂原 御吉祢村名の氏神と

瀧尾坐神社 國王宮と称し [illegible] 原瀬の氏神と

天神祠 二所あり一所は引出村小あり [illegible] 井清名の氏神と 一所は辻堂村小あり [illegible] 平殿祢老書名の氏神と

伯母子嶺 今西村の南小あり十津川荘 [illegible] 荘瀬原村の男と 又水谷あり [illegible] 路尤嶮し

大滝 小滝 俱小十津川荘小原村小あり

芋瀬渡 祢川小 温泉渡 東泉寺小あり十津川を渡に

と崎坐神社 [illegible] 氏神と

寶蔵寺 十津川荘五百瀬村小あり 俗伝曰

平維盛墓 十津川荘五百瀬村小あり 吉老曰寿永年中乱分 [illegible] 盛の建立と [illegible]

佐久間信盛墓 十津川荘武蔵村光明寺小あり 石碑あり 天正四年七月十二日卒に

白屋嶽 白屋村上方ニあり　高原山 高原村の上方ニあり紀州限之山頂險峻すくなし

備後山 北山荘ニ給村ニあり紀州限之山頂險峻すくなし

出谷川 奥谷ニ源湯川村より流れ西川ニ入

西川 源遠西川村より流れ来畑ニ至て十津川ニ入

小井瀧 来畑村ニあり　小原瀧 小原村ニあり紀伊国石頭ニあり

風屋瀧 風屋村ニあり

備後川 紀州より流れて大塚ニ至る

憩息石 祇園村茶店の前ニあり俗曰護良親王の休息の石

池峯 北山荘池峯村の山頂ニあり混水藍の如し樹木環繞

池峯坐神祠 池峯明神と称し北山荘八村の氏神なり

河津國王神祠 二社林村ニあり本宮と称し境内ニ神宮寺あり別宮ニ上北村ニあり迦藍七村の氏神なり

林泉寺 北川荘白川村ニあり白雲山と號す

異像瀧 長殿村ニあり深淵清涼すべき形勢義経あり

水分神祠 小瀧村ニあり北山荘五村相共ニ敬祭ス

白瀧山寶泉寺 北山荘西郷村ニあり本尊観世音なり北の龍の記ニ曰南都興福寺勅願寺紀州牟婁郡熊野奥北山内泉村興泉寺永亨九年丁巳二月建立開山車僧と書ス興泉寺乃故蹟ニ今當院の東ニあり又西ニ滝あり高サ二十余丈

王住山龍川寺 北山荘小瀧村ニあり伝曰南帝皇居の古址ニ後ニ當院と号ス神祠あり当寺開基南帝自天勝公正聖佛ノ神位康正三年丁丑十二月二日又遺教經跋曰寶德二年庚午之秋建當寺云云

芋瀬荘司宅址 小瀧村

竹原八郎宅 谷瀧村ニあり大塔宮護良親王寓居ニ在る紀ニ見ヘタリ

尼妙圓宅 小瀧村ニあり右伝人妙圓大塔宮ニ捧粥を供しけるなり

池原川 一名北山川と云東川西川等池原ニ合し来原の属村小井ニ至て紀州ニ入

佐田川 源深沈峯山中より流れ佐田来原大里ニ経て川ニ至て池原川ニ入

葛川溪 源地蔵岳より流れ葛川ニ経て神山ニ至て安曽川ニ入

安曽川 源北山より流れ紀州ニ出又神山ニ属紀安曽ニ入て安曽の山ニ至て一国界ニ遠り竹筒村ニ過て紀州ニ入

柳本渡 来畑村ニあり西川ニ合海を

獨木梁 小原村ニあり溪中の處々ニ十津川ニ跨ク

上渡下渡 俱ニ池原村ニあり東川ニ合海を

神山渡 田戸村ニあり北山川ニ竹筒村ニ海を

菊の夜分かせりもの外に験道の秘所うれべくやそくこんるるかし
小松組

山上蔵王毎年四月八日より九月八日まで拝人佐をもるの日毎に数多こゝへ来詣かゝーナ月第安祭ちより山上まで六里あり
七月の終いかゝ当山乃修験道の山伏入峯に峯中に二百八十所の岩窟あり蟠桃窟聖天窟菊窟生窟編福窟あるいは大あり蟠桃窟い源えの二町余窟の奥に池あり菊窟いそ乃岩こゝろぐく

山上嶽（大和志曰吉野山より南六里洞川の東南にあり）山勢高峻にして霜雪嚴寒なり
山頂に澡浴あり其所より山路嶮岨にして大天井大上乃二嶽なり
踰えれば今宿の茶店あり（多古村に属す）又洞辻の茶店あり（洞川村に属す）
より大鞍掛小鞍掛の二坂を歴て鐘懸岩西臨岩なとをへてに
至る巍々たる梵閣あり本尊藏王權現役優婆塞なり安置す
又古幢あり（鐃撥もなく堂の縁にたてり其銘に曰遠江國佐野郡原田莊長福寺天慶六年七月二日云云）

金葉

大峯にて

もろともにあはれとおもへ山櫻花より外にしる人もなし　僧正行尊

玉葉

修行し侍りけるに大峯にて

時ありて外山の末も晴やらぬ雲のうへなり峯の月かけ　僧正救範

二面に巨巖多くして南にあるは涌出岩といへり東北にあるは
蟻門渡と號し飛石東臨岩行道岩屏風岩等あり西の方稲邑
嶽に望みて僧舎六區あり吉野の山僧ここに安居をなす又東行一里を
へて小篠といへるに至る則行者堂聖寳堂護摩の石壇大黒
石窟あり

山家集

小篠のとまりと申すにて露のしげかりければ

わけきつる小篠の露にそほちつゝほしそわつらふ墨染の袖　西行

又西南一里をへて脇宿といへるあり一名石篠の宿といへり

山家集

笹の宿にて

庵さす草の枕に友なひてさゝの露にも宿る月かな　西行

又東の方二里たらすに普賢岳といへるあり又東の方に一里余ゆけば
児宿といへる所あり其東の方二里たらすに行者帰といへるあり又行
こと二里八町に至りて御山といへるあり又南五里をへてゆけば則
釋迦岳なり（北の方吉野山より南の方玉置山まで此嶽中といふ）

行者ちごとて見しと帰りにつれたるをくやみ
其のしげさ屏風とそ申所なるにて
そこんのなくておもひく行者ちごのとまり
よりさくもおもひつゝくるなるべし

山家集

屏風にや心をたてておもひけん行者はかへり児はとまりぬ　西行

山家集
大峯の神仙と申す所にて月をみてよみける
深き山に住ける月をみざりせバおもひでもなき我身ならまし　西行

御山ハ山上嶽より南の方六里ばかりにあり層巒畳嶂として山路嶮しく所謂御嶽神仙といふもの也又御山より南の方十町許に大日岳あり又其南一里ばかりに小池宿といふあり平地宿ハ又南二里ばかりにあり是より二十町南に至るをいふ転法輪岳といふ又南へ三里十六町ばかり歩りて佛陀辻行善宿なりしばらく足をやすめて天狗岳に至る

山家集
小池と申宿にて
いかにして梢の隙をもとめえて小池に今宵月のすむらん　西行

山家集
平地と申宿にて月をみけるに梢の露の袂にかゝりければ
梢なる月もあはれをおもふべし光にぐして露のこぼるゝ　西行

山家集
転法輪のだけと申所にて釈迦の説法の座の石と申所をおがみて
爰こそハ法とかれける所なれきくさとりをもえつるけふ哉　西行

天狗岳より南の方一里ばかりに地蔵岳あり其南二十七町にして東屋岳といふあり是より東南十八町にして千種岳に至る一名仙嶽ともいふ又笠捨山ともいへり続て姥捨山に連るゆゑにかく名づくといへり又西の方二里二十町に古屋宿あり其南一里十四町ばかり踰て花折宿に至る其西の方にあるを経の尾といふ又西南二十五町ばかりゆけば玉室岳にいたる又西南五町ばかり去て玉置権現立給ふ

山家集
あづまやと申所にて時雨の後月をみて
神無月時雨はるれど東屋の峯にぞ月はむねとすみける　西行

山家集
ちくさのだけにて
分て行色のみならず梢さへちくさのだけハ心そみけり　西行

山家集
をばすての峯と申所の見わたされておもひなしにや月ことに見えければ
姨捨ハしなのならねどいづくにも月すむ峯の名にこそ有けれ　西行

拾遺愚草
三芳野や姨捨の山ハ花もひとりかへるさむゆき乃曙　定家

世説曰
嵩山の北ふ窟あり晉人ありて
くるの千日をうりあ〜て室内
明るくして盈のめ〜時に
碁を圍むの老翁二人
あり晉人に一盞の酒菓
を進む忽蜀中に生くす
年すでに落下ふゆる
又張華とゝ人ありて
はるく所謂仙館
飲くるものに
玉漿金人
くるりのゝ
龍穴の石髓
うり果〜く
長壽うりとゝ
我朝の山上嶽の
岩窟もゝしら

山上藏王權現と役優婆塞金峯に千日籠て生身の藏王を
いのり給ひし地藏尊の像地中より涌出しの人足優婆塞の御心を
叶はんとて地藏菩薩を伯耆國大山に花をみひこ其後
大智念怒の像あらはし右の御手をこ鉢をふさり臂をいらげ
左の御手をこ五指をのべ御膝をさへ給へり魔大ふいをうく魔
障除仏の相をあらはし大地の經緯をあらはし給
つらしは人皇廿九代宣化天皇紀に年ふること優婆塞の御齢い十五才
うりうりひふ十五童子涌出あり其八大童子をかたどりをふ
第一檢增童子 阿閦佛垂跡 在辯師宿
第二後世童子 師子音王佛垂跡 在多輪宿
第三虛空童子 虛空住佛垂跡 在笙山石屋
第四劔光童子 帝相佛垂跡 在篠宿
第五惡除童子 阿彌陀佛垂跡 在王未宿
第六香精童子 多摩羅跋檀檀佛垂跡 在深山
第七多悲童子 雲自在佛垂跡 在水飲
第八除魔童子 釈迦牟尼佛垂跡 在吹飯
又七大童子をかたどりをふ葛城の峯ふもとをはり足をり涌出嶽といふなり 酉誉曼陀羅抄

それより尊像を錦帳の中ふ獵をと其涌出の跡を秘せんとすれ
優婆塞と天曆帝村上天皇とをのくをづからをこの尊を化をこをこ
安をーなをれ人悪愛をこ千日をふ列ふをらーく他を足ーこ此を非ー
賞罰をこ千世畏ふをーをらーく人を脳ーをを利ーを那ーく祈明
檀迹をーをーく七千余座の利生をのをーをうをを協をとをこ益一
亦無この霊験あり 太平記
役優婆塞を大和國葛城上郡茅原里の人をーく高賀茂氏をり
舒明天皇六年ふ出誕ーをれ若年をーをーをひをーく学び仏道を敬
ーを十二才の時をーをーをれの岩屋ふ籠て藤を衣ーをれ乃苔を
ーを十二才の時をーをーをれの岩屋ふ籠て藤を衣ーをれ乃苔を
をひをものをーをーを孔雀明王の呪を唱ーく五色の雲ふ乗ふ化宮ふ遊
をれ人二の鬼をーく水ふをふををつ人ふ使をーをーをるをー
一ーを世をつーをれの石橋をかをけんーを一言主神を呪縛ー其西乃
獄ふ入ーく龍樹大士とをーをーをひをどーをーをーく書ーをれをべ

紙墨をもおよび文武天皇大寶元年六月七日壽齡
六十八歳にて母父が棺に入竹の葉が浦ふう吹く海に入く
後日人のなげを家に道昭法師と孫とふあり時新羅の山中に
してむかふる虎に遇ひその中に役行者の授ける虎あり祠が
遷ぜしと吹く師錬和尚を是がばかりく代のたくひかそへらと
ふり稱まる及び西巻おそれぐこと小ふ人くふり一夜吹ぐこと不二の家へ
来臨ーかくおりくるへのを仏と吹く中華みくに光これ
仏人くおりはをふ水境ふんへくふり大寶元年入定ふり
今寛政二年に至ッく千九十余年にあり
夫大峯に役優婆塞をぐくひたれひしふり里霜はとふく
中級ーはとに通ふに荊棘のとぐをふり吹く徑に醍醐乃聖寶
僧正いくぐら吹く教霊岳が窟ーくせんやふくに再び開基ーあり
しへ右新ふり世をかを本とふーふ洞川ふり系八十町が中ふが當と
うがはふ逆とふもりへ是聖室ふ師のひたれへ新

釋迦岳御山のあ五里一名棘法福岳ふもりへ郡内の備と秀く最
雄峻みくく遠く眺めは磊壯石が布ぶ
善鬼里北山莊十九村の内ふり 本と當山御入峯乃時は里ふり止宿
善鬼村ふあり遠く眺めは磊壯石が布ぶ
屏風巖善鬼村ふあり遠く眺めは磊壯石が布ぶ
善鬼川家集の和歌に釋迦岳ふ善鬼が流れく白川の屬邑
都藍尼和州の人物志の其一人ふり 當國 むかし右新と吹く禁ふ都藍尼と吹く仏
女あり金峯と吹く茅舎の北みくに藏王權現の霊域ふ是女人が
のほくーはふ我女人ふ仏御が浮ふいくぐらのぼ
わくんやとく大峯苦行の道ふ吹く内忽雷電霹靂とふく
通ふ吹くふ其所ふく杖が捨ふりふ其杖枝ふ吹わし
大木とふ吹く呪文が吐く龍が及び昇其龍ふ乗ーて飛行せ
しぐく至りく龍ふをみえくれば都藍尼つぶやきふぐく

いくりく巖谷を分て又躋ぬきて中ゝを〻微塵に
多龍を池小入紀ゆ名を小祭に其後の所を知らず

大和名所圖會卷之六 大尾

大和名所圖會後

佩蘭清先生責序其文曰山跡國
世從人皇之肇代に鎮都久矣
茅雉に地臺而功名之人傑不寡
古今云云地臺世之笠に山祝
寶祚九五之福護四社之臺后宮
八乎に書編に乎熾矣乎人傑世
貢吉備氏仲齊之業而往に無際
佑豈因天府之國哉 奉京畢業

都而一千五百有餘葉や故名區
勝境頗多矣或詠於和歌或咏於
詩賦亦ふ一の舉而計矣越延寶中
村氏著和州舊跡幽考又近頃勝
寓言欲撰大和名勝志而僅之分
許而沒矣予近年著都名所圖會
爲後之西緯倚平國而以汲之芸
蓉庵告於予彼寓言之遺志廼得
乎草稿而以撰大和名所圖會七

卷唯憾如得王烈之抱犢山之石
室ら一書ふ求於林東や敢非侍之
文史聊以幸一遺命而已

寛政三歳次辛亥皆四月

玉森　秋里　舜福　湘夕

其中書屋

畫工 浪花 春朝齋竹原信繁

大和志 芦河先生著 全部八冊

大和國名所大繪圖

神社佛閣名所旧跡土産名物隣國を法ホウ々を絵圖よりつゝ一枚摺全一冊

南都町圖

此圖ハ南都の神社佛閣町小路を殆ホボ洩モレなく此名所圖會ゑかくるゆゑ月をかさるとて通ヒ換なし

大和巡覽記 貝原篤信著

此二書ハ大和の名所旧跡神社佛閣遍歷ヘンレキ洩モレなく記ス是ハ紬ツムギ大和めぐりなれ人を導ミチビキ業内ハ深く通ヒ費なし

やまのぼりめぐり道枝折

此名所圖會を以てめぐるハ山中ハ峡谷より到て其所の人を案内者とす

寛政三季辛亥五月發行

京師書林 小川多左衛門
森本太助
浪華書肆 柳原喜兵衛
高橋平助